

明治期の来日外国人の日本観(三)

——オールコックの場合 (2) ——

針 生 清 人

一

中国広東に勤務していたオールコックは、日英修好通商条約の締結(安政五、一八五八年)に伴って「恒久的な外交使節団」の長(駐日総領事兼外交代表)として来日する際、日本についての明確な知識は皆無であるといつてよかつた。彼が日本について情報を得ようとしても得られなかつたからである。「蒸気船が三日で横断するせまい海」にへだてられているにすぎぬ中国においてさえ、「日本についてはっきりしたことや正確なことは、ほとんど知ることができなかった」(上四五頁¹)からである。また、彼が勤務していた福州にも琉球諸島から隔年に船がやって来るが、彼の公的な地位(福州領事)や個人的な努力をもってしても、水夫たちに連絡をつけることがかなわなかつたという。情報収集については、日中両国では「外国人を排斥し、回避しようとする両国民の政策はあまりにも完全に一致していて、とても成功は望めなかつた」(上四六頁)という事情にあつたからである。従つてオールコックの日本に対するイメージは「測りしれないほど

とおくにある」というものであり、「はるかな水平線のかすみのなかにかくれていて、まったく忘れられているのではないとしても、一種の伝説的、

神話的な性格を帯びた存在であつた」(上四六頁)のである。それほどかうに、オールコックにとつて「遠い異国」である日本は、しかも「外来者を手厚くもてなすどころか、かれらが否認する信仰をもっている外来者を迫害することに熱中」(上四九頁)している危険な国でもあつた。そのような日本での勤務は、「文明のすべての中心からとおくはなれたところに——鉄道も電信もとどかないほど遠いところに——いっさいの社会的なきずなを絶たれ、同族の人びとから孤立し、まるで追放人のように暮らさねばならない」ということを意味するが、そのような日本にオールコックをおもむかせるのは、「選択の許されない義務」を果たすためではあるが、それ以上に彼の関心が「たえず増大しつづける西洋の工業製品のために新しい市場を提供するらしくみえる日本にそがれて」(上四九頁)いたからである。いづれにしてもオールコックの日本における行動は、「われわれが賭けている国家的・恒久的な利益にとつてなにが実際に最善であるか」(上

二二二頁) という視点からなされていくことになる。

来日以前にオールコックは日本への航海記や風物について物語を若干読んではいたが、⁽²⁾「全人類にたいして断固として門戸を閉ざしていた国民について、かつて親しく観察して学んだ人があったとしても、そのようなものの記憶は、時と距離のため多分に抹殺されて」(上四五頁) おり、「日本と日本人にかんするわれわれの知識のすべてには中世的な色彩が加味」されたものであった。しかしそれは日本の鎖国の結果である。日本人がいかに「生活し、行動し、存在しているか」(上二八七頁)、日本の国民と国家の特徴は何かを論じたものがあったとしても、「現在の日本」のものではないからである。しかし現実の日本には、対外通商条約の締結を通じて伺い見ると、「日本の天然の産物では応ずることできない……需要が生まれ、そのために日本人は外国市場に目を向けるようになっていた。こうして、日本人の頭にはすくなくとも、外国貿易が行われると自分たちの利益になるという考えがうえつけられていた」(上九四頁) という事実があり、鎖国日本の内部に大きな変化が起こっていることである。イギリスの目的とするところは、そのような「日本の産物とイギリスの商品とを交換することによって直接的な貿易を開始すること」にある。それを推進するのがオールコックの任務である。

しかし、イギリスの国家目的を第一に考える外交官としてのオールコックと、直接に貿易に従事する商人たちとの間には大きな落差がある。

「あなたは、イギリスの領事として、国家の利益と恒久的な利益について考えることを義務づけられている——それがあなたの仕事だ。それに反して、わたしの仕事は、できるだけ時間的に損をしないで金をもうけること

である。……おそくとも二、三年もたてば、わたしはひと財産をつくって、さよならできると思っている。……われわれは金もうけをやる実際的な人間なのだ。われわれの仕事は、できるだけたくさん、できるだけはやく金をもうけることだ。そのためには、法律のゆるすかぎりのありとあらゆる手段や方法を是認する」(上九二頁) と語る上海在住のイギリス人有力者の発言とそれを裏づける実情について、オールコックは勿論否定的であるが、彼ら商人たちの悪いやり方を「防ごうと努力しても時間の浪費だということ、よく理解することができた」というわけである。「つきからつぎへと、商人・事務員・倉庫人——いわば何代にもわたるこういう人びと——がやってきては去ってゆく。五年ないし十年間滞在しては、あとは野となれ山となれと……ひと財産をたずさえて去ってゆく。——あとにつづく多くの人びともそうすることであろう」(上九二頁) と、中国に在って私益を求める英国商人たちの姿を捉えているが、何れはこのような商人たちが日本にやって来るのである。

オールコックは、「地球の反対側から、もっとも公正無視で、ひたすらに恩恵を与え、相手国の利益ないし文明の向上のために貿易を行なうことを念頭に艦隊が行動を起こし、使節が派遣される」(上二〇八頁) というような見えすいた嘘でやすやすとだますことができるとは全く考えない。全くそれとは逆に、「日本人にわれわれが尊敬と信頼にあたいたいということを知らしめることが望ましい。異国同士の恒久的な親善関係はすべて、すくなくとも現代においては、相互の利益ないし便宜にもとづいたものであるべき」(上二〇八頁) だと云い、それ以外の基盤に立っては恒久的な親善関係は樹立できぬという信念を吐露するのである。しかしオールコックも

砲艦外交を完全に否定するものではない。時には強面の外交官ぶりを発揮するのはその後の活動を見れば明らかである。しかし、日本に開国を迫ったアメリカ海軍提督ペリーがとった砲艦外交の威嚇主義とは基本的に異なるといえる。

二

アメリカが独立した時期は絶大な制海権を有していた海上王国スペインが没落し、太平洋をめぐる新旧海上権力の大幅な交代が進んでいた。この

時期は航海技術、軍事科学の面でも通商貿易の内容の面からも更に国際関係一般のあり方からしても大転機であり、各国ともに海軍力の増強に力をいれていた。そしてそのトップに立ったのがイギリスであるが、パナマの地峡のもつ軍事的、経済的な価値に着目するウィリアム・バターンソン⁽³⁾は次のような報告をなしている。すなわち二つの大洋に挟まれたパナマの両側には良港があり、この両港間の往来は簡単である。そしてこの要地・交通路を獲得して要塞化することが必要だ。そのためにはまず制海権を獲得し、これによって永久に保持しようというのである。その目的とするところは、年額三万ポンドを下らぬと算定される産物にあるが、さらに「中国、日本、その他の東インドで最も物産豊富な地方にいたる航海に要する時間および経費は、これによって少なくとも半分にまで軽減される。同様、これらの地帯におけるヨーロッパ商品の消費もまた倍増し、さらに行く行く年ごとに増大すると考えなくてはならぬ⁽⁴⁾」ということを目的にしている。

このような意見は、当時のヨーロッパ人がアジアに大していただいていた通常の感情であったと思われる。太平洋や日本という未知の市場に対する

関心から、交易路発見のための様々な試みがなされる。日本近海に出没したロシア軍艦の動きも世界的な太平洋競争の一環であった⁽⁵⁾。オールコックも「イギリスが直接貿易を開始するに当たって、まず第一に着手すべきことは、日本沿岸の正しい測量、燈台ないし水路標識の設置、陸標を見やすい場所につくること、航海者が海岸を認めればあいにその位置や航路などわかるようにすることである。わたしは、中国へ着任した直後に、イギリス測量船のシナ海派遣の実現に、大いに努力した⁽⁶⁾」(上一〇三頁)というのと同じ見地からである。

アメリカ海軍もこのような背景のもとで専ら通商破壊戦のために創設され、ペリー執筆による「海軍雑報」(一八三七年一月)によると一八三六年現役軍艦比較では世界第八位である。ペリー自身は海洋権益拡張の立場から実用的な戦闘用艦艇の増強に努め「蒸気海軍の父」と呼ばれていた。

すでにアメリカ海軍は地中海において対英戦争(一八一二年)を戦い抜き(ヘントの英米平和条約)、アルジェに戦線布告をなして第一陣十隻の軍艦を派遣し、続いて第二陣を派遣している。それは典型的な砲艦外交、示旗外交であったといわれる⁽⁷⁾。そしてそこで得た戦訓の第一は、示威行動を行うに当たっては可能な限り強力な部隊を動員するとき満足すべき成果をえることができる、第二は必ず第二打を用意し相手により大きな畏敬を与える必要があるということである。そしてペリーはこの戦訓を十分に生かして日本との外交交渉に望んだと指摘されている。また、ペリー個人はダーダネルス海峡で東洋人との交渉のコツを知ったという。その第一は先ず恩義を売ること、第二に仰々しい礼儀作法の限りをつくすというものである⁽⁸⁾。

その後アメリカはテキサス併合(一八四五)、メキシコ戦争(一八四六、四八年)を行ない、オレゴンの境界画定要求に始まりカリフォルニア占領に終わるが、それはアメリカの太平洋海峡での経済競争参加の始まりでもある。ペリーはその本国艦隊総指揮官であり、中国、東南アジアに続いて日本との交易の必要を見ていた。それは太平洋捕鯨業との関連以上に燃料用石炭補給への期待からである。

ペリーは一八五二年十一月二四日ヴァージニア州ノーフォークを出航し、五三年五月二六日沖繩本島に到着。沖繩は無抵抗であったが、ペリーは日本との外交交渉を行なう上での予行演習を行なうとともに、沖繩に海軍基地を獲得するならば極東におけるイギリスに対抗できようとの報告を残している。

五三年七月二日那覇出港、小笠原を経て七月七日伊豆到着、浦賀に投錨以来、沖繩で予行演習をした通り、全く威嚇につぐ威嚇をもって開国を迫ったのである。それはペリーの、ひいてはアメリカ海軍の太平洋で収めた最初の砲艦外交の勝利であった。その威猛高な姿勢も、日本の鎖国が封建制の維持を目的にしたイデオロギー的性格のものであり、その目的を變更せぬ限り開国の見込みはない。しかも鎖国とは「外交の不在」、すなわち国際的慣行の不在、に他ならぬから、ペリーの威嚇主義も成り立ち得たのである。何れにしても、開国要求の目的は領土の拡張ではなく、経済活動の拠点の獲得にのみ限られていたことが、日本にとっては幸であったといえよう。

三

オールコックも海軍力を背景にアジアに一大経済圏を作ろうとするイギリスの外交官であるからには、軍事力を完全に否定しはしない。しかしペリーの如き砲艦外交を直ちに是認するものではない。英国もつねに新しい市場の開拓、東洋諸国民との新しい条約締結が要求されているが、経済的あるいは博愛的な見地から、またはその両方から平和を維持し、東洋との紛争を避けるべきだという強い圧力を受けている(上三三頁)という事情があるからに他ならない。しかも敵対関係が生じ武力を発動するに及ばば、日本を滅ぼすのは確実であり、かつてスペインがメキシコで行ったように「日本人の文明を吸収するというようなことは期待できない」(上三九頁)からである。それ故、オールコックが外交官として考えなければならぬ問題は、第一に西洋の東洋における外交の本質的な固有の条件は何か、第二にヨーロッパ人の行動を支配する必然又は偶然とは何か、第三に武力、その他の強制的手段に訴えずに相互に異なる文明を融合させ新しい市場開拓の努力するが、その成功はどの程度望めるか、というものであった。そうであればあるほど、日本のことを知ることが重要となってくる(上三〇頁)。

そのためにオールコック自身は「探究好きなヨーロッパ人からとおざかっていたこの国ならびにその国民について、われわれが現在もち合わせているあらゆる情報の源をしらべて」(上二〇三頁) みようとするのである。それは当面、「この帝国がどのように構成され、どのように統治されているか、国民がどのように生活し、働き、取り引きするか、(英国が)供給

できるものでかれらが欲しがりそうなものはなにか、ということを知る」(上一〇六頁) ことに向けられる。それについて彼は「目的において誠実であり、悪意がないという点に堪しては、わたしは十分に自信をもっている」(上一二八頁)と自負するところである。そして「日本人にわれわれが尊敬と信頼にあたいするということを知らしめ……、異国同士の恒久的な親善関係はすべて、すくなくとも現代においては、相互の利益ないし便宜にもとづいたものであるべきだ」(上一〇八頁)と自らの依拠する立場を明確にするが、それは従来のヨーロッパ人の態度を反省するからに他ならない。すなわち、中国はじめ他の東洋諸国にあって先進国は「かれらを子供あつかい」し、「われわれがいかにうそつきで誠意が欠けているかという確信をうえつけるようなことをしがち」(上一〇七頁)であったことの反省によるものである。

オールコックは先ず、西洋と初めて接したとき日本はきわめて開かれた態度を示していたが、「外見的には突如として強烈に起こったように思われる日本の政策の変化は、いったいどうして起こったのであろうか」(上一四頁)、また、聡明な目で見守っておれば明白に認め得る変化の前兆を見逃したために、「突然起ったように見えるだけ」で、実際には、「徐々に現れてきた」のであろうか、すなわち何故に「鎖国」に至ったのであるかを問うのである。それに対してオールコックは、ヨーロッパからやって来た様々な修道団の知行、僧侶たちの自慢、貪欲、傲慢、横柄、商人たちのむさぼりが原因であるにしても、さらに徹底的な敵意を抱かせる他の原因が大きかったとするのである。

各種修道団の成功の大部分は封建諸侯の政治的恩恵、権勢に依拠したも

のである。しかしブルボン王朝がそうであったように、「太閤様」もその統治権の強化と世襲化をなすことによって諸侯の衰微と弱体化を策したもので、封建諸侯は破滅、屈従が運命づけられており、諸侯と提携するものは諸侯のたどる運命に従わざるを得なかった、とオールコックは指摘する。

さらに、日本における修道団の没落と破滅の決定的な原因は修道団側が「精神的な主権を要求したこと」(上一二六頁)にあるという。封建社会における精神的な主権は専制権力に他ならぬが、「いったん信者となった日本国民に大して、臣下として忠誠を誓って教会の命令に絶対服従すること」を要求するのが、「精神的な主権」の要求に他ならず、「日本帝国の法律とちがう法律」(上一一九頁)が日本国内にもちこまれたことを意味することになる。いずれにしても、「自分の臣下の良心およびかれらの個々人の判断の権利が精神的な指導者(聖職者)の手にゆだねられることにたいしていく嫌悪の情」(上一二〇頁)は、当然のことであり、自己の政治権力を維持せねばならなかった日本の支配者が「必然的に相反する」制度として「精神的な主権を要求する」修道団を否定したことはこれまた当然であったとオールコックはいうのである。そしてこの原因こそが、「全ヨーロッパ人の最後の追放、全キリスト教信者の根絶、ならびに二世紀にわたる鎖国をもたらした」のであり、「諸外国と条約を締結した今日においても、いぜんとして日本の支配者たちに不信と不安をいだかせる原因となっている」(上一二〇頁)と明確にいう。この点オールコックが強調するのも、この問題が過去の問題ではなく、「さいきんの条約のもとでふたたび起こっている問題」でもあるからである。

四

また、オールコックは貿易の面でも日本に損害を与える原因があったことを指摘する。商品が不当な高値で取り引きされ、少量のヨーロッパの織物の見返りとして貴金属がたえず大量に流出した。しかも金銀の交換比を利用しての金の大量流出、いずれにしても、金銀という「土地の骨と髄」の流出が外国貿易に対する強固な反感を植えつけ、「外国人にたいしてまったく門戸をとぎす布告をださしめるもつとも適当な地ならしをしたに相違ない」(上二二二頁)といわざるを得ない事情があったことを述べている。法外な貪欲、過度の獲得欲は「少数の人びとを突然に富ませるかも知れないが、国家的に重要な恒久的な貿易関係を樹立することは不可能」であること、個々人が法外な利益を追求することは「あとでやってくる人びとがすべて失敗すること」(上二二三頁)になること、「一個の貿易業者は富裕になるかも知れない。だが一国家は、金の卵を生むガチョウを金をとるために殺すようなことをしないで、あとにつづく世代のために念入りに飼育し、世話すべきことを要求する」ものである。それ故今や何れかの国が貿易を独占することも不可能となり、「現在では、競争が東洋の諸国民のうちのきわめて未開な国民とも、西洋の貪欲と法外な価格の犠牲になることを防いでいる」(上二二三頁)と述べている。が、果して実情はどうであったか。この発言は実情から見てやや自己を美化しすぎかとも思われる。

それに対して、オールコックは日本のことも美化している。すなわち、オールコックが日本を知ろうとする姿勢は、前述のように中世的雰囲気

包まれた遠い国日本をただしく知るといふことにあるが、それについても「実際のあるがままの近代のユートピアへ日本Vをうそ偽りのない姿で知る」(上二〇六頁)という語句からも知られるように、西洋近代のアカにまみれぬユートピア日本という捉え方である。⁹⁾従って鎖国日本が封建社会であるにしても、その封建制度も日本では「秩序と法と正義」「社会秩序と平和と繁栄」(上二二五頁)をもたらしたものである。これについてはオールコックが来日以前に日本のことを学んだスエーデンの医師トウーベンベリの発言、すなわちヨーロッパと同じ封建国でありながら日本には圧制と悪、不満と革命の企てがないという発言、を踏襲しているかのようである。「日本人は地球上の三大地方に住んでいるすべての国民のうちで第一級に属し、ヨーロッパ人と比較されるにあたいする国民である。日本人は多くの点でヨーロッパ人に負けてはいるものの、他のさまざまな点では正々堂々とかれらを抜いている」、「国民性をかたちづくっている堅実さ、法の執行とか公務の運営をつらぬいている不変性、有用なことを行ない、押しすすめてゆこうとするこの国民のたゆまざる努力、その他同じような性質の数多くのことを称賛せざるをえない」(上二二五頁)、これが日本および日本人だということである。しかもこの日本の驚くべき状態のうち最大のもは「多くの宗派が協調し合って共存していること」、「約三〇〇万の国民が、飢えと欠乏をほとんど知らぬ」(上二二七頁)ということをあげている。この後者については来日外国人の大かたの認めるところである(ただし、野菜・果実の品種の少なさ、貧弱さ、また畜産品のないことについてはまた共通した認識である)。また、多くの宗派の共存する状態についてこれを美的と評価することについてはオールコックは少数派であり、大

かたは日本の「無宗教性」を指摘するところである。¹⁰⁾

スエーデンの医師トウンベリの捉える日本像は、多数の日本国民は普遍的に祖国、政府、お互い同士を愛している、鎖国によって法は長らく変更されなかったが、正義と法が公平平等に行なわれている、政府は専制的、違法行為が禁ぜられている、国民は特定の国民服を着用し衣服の絶対的の様があること、対外戦争・内乱がなかったこと、歩兵・所得税がないこと、食料が貧者への最上の贈物であるが多くの人は常に満腹していること等々にある。しかしトウンベリも他の人と同様に「法律の厳しき、警察の厳重警戒」を特筆している。このことによって日本は風紀、秩序が整然としており、罪悪がすくなく差別もないこと、連帯責任、監獄が厳しいこと、を特色としている。また、台所、風呂が設備されていることも日本人の清潔さと関連させていること、多くの点で風変わりであることも多く人と見解を同じくしている。警察および官僚制度の厳しき、奇妙さについてオールコックはあるアメリカ人の観察を紹介する(上一三頁)が、本人も後日それを体験することになる。

「役人は、互いに採り合うように二人ずつ組んで勤務しており、この制度は日本の政治組織全般におよんでいる。これはスパイ政治だ。だれもが監視されている」。これは五人組制度、連帯責任の紹介であるが、これにより、役人は互いに及ばず庶民においても「絶えざる不信によって臆病になるがゆえに、必然的に刑罰が残忍となる」。従って、役人の法律違反、失敗等は死刑となるが、役人たちもそれを予期して、しかも不名誉と破滅を一家に及ぼさぬため切腹することになる。それ故、「このような制度のもとでは、取り調べにもとづくとか、あらゆる種類の生活状況に適應するといっ

たような思慮分別のある法律のようなものは、ありえない」のであり、役人は「私人としては率直で、誠実で、親切」であるが、「目上の権力者から叱られまいとしてうそをつき、術策を弄する」傾向が強いという。来日外国人のうち、特に外交官は日本の役人が何事につきも速答せず、要求に対して言質をとられまいとして様々にいい繕う様を「ウソ」といい、激しく批判することも大かたの人に共通したことである。¹¹⁾

また、来日外国人は様々な禁令によってその行動が厳しく制約されていたことから、日本の法律に注目することも多いが、その法律の厳しさに驚嘆することも一様である。日本では「大半の犯罪の刑罰が死刑」であり、「日本人の処罰は、ひとつの法律を犯すものは他の法律をも犯すであろうとか、故意に法律を犯す者は生きる価値なしという主義にもとづいているようだ」という推測から、日本の「法典は、おそらく世界でもっとも残忍なものであろう」と結論づけている。

また、オールコックがある米国の著述家の日本旅行記を読んで印象にとどめているのは、次のような点である。日本では強力な政府のゆえに財産にたいする犯罪が少ないこと、街頭での喧嘩は日常茶飯事であること、国民は暮らし向きがよくて満足していること、うそをつくことと酔っぱらうことが多いこと、婦人はどのアジアの国よりもたかい地位を占めていることが、売春が政府によって奨励され、また道徳家たちにも認められていること、などである(上一三三頁参照)。

医師にして宣教師であるマガウアン博士からは、異なった見方を得ている。日本は僧侶の政策と国家を統治する術がほぼ達成していること、スパイ制度は中国の警保局の任務の極端な実行にすぎぬこと、スパイは新聞の

役目を果たしており国家に有益な制限を加えるものであること、従ってスパイ制度の存在は高潔な役人には決して苦痛でないこと、政府は全知でありその結果強力で極めて安定していること、庶民に対する束縛は絶対であるが平等なので、社会はその存在をほとんど意識していないことなどをあげ、マガウアンは日本の法制度を肯定的に捉えている。これに対しオールコックは、「権力は正当に行使さるべき」であり、個人の自由、安全、自主と秘密警察制度は両立し得ぬし、人々に不信の種をまき自尊心という人間らしい感覚を奪い、下劣、不道德な密告を奨励するような不健全な基盤に立つ政治制度そのものを否定している。

以上のような日本についての知見を基礎にして、日本の様々を推測しながら上海から海路長崎に入港したのは安政六年五月四日のことであった。

五

日本に上陸したそのときから、オールコックは旺盛な好奇心のもとに観察しはじめる。そして「ひとたびその国民のなかにはいれば、ただちに空想と実際に生きている現実とがひじょうにかけはなれていることを知る」(上一四六頁)のである。目につく全てが西洋のとは異なるものばかりで、先ず、日本の容姿・人相・服装が独得だと気づく。一般に労働者は鉢巻をするだけである。そして彼を特に混乱させたのは女性である。成人女性のお歯黒⁽¹²⁾、赤レンガ色の濃い口紅、幼時より嫌悪の情を人に示さぬようになされるしつけ、これらは西洋人の女性概念とは異なるものである。

街の生活は、すべて店の表は開けっ放しになっていて、なかが丸見えであり裏には必ず小さな庭がある。人は座ったまま働き、遊び、どんなこと

をしているか——食事、昼寝、行水、家事、はだかの子供の遊戯、商取引、手細工——何でも丸見えである。それは日本ではスパイ政治が完全に行われているのに、さながら「国民の側からすべての秘密を廃止してプライバシーをまもりたいという欲求が達成されたかのような感じ」(上一四八頁)がするといひ、日本の家屋の構造、仕組が「日本人のあらゆる面を知らするための縮図」(上一四七頁)だという視点を示している。

文明の性格は気候によって決定されるというバックルの主張は、日本の文明の性格を「よく立証」しているといひ。服装・被服、謙遜・礼儀の要求などは気候に確実に影響されている。また労働者の状態は原始的な純潔と清浄の状態に近く、日常も「はだかであつてもはさしくない」といひ生活をしている。日本の女性はヨーロッパの上流婦人よりも貞節である。また日本の男子は道徳的だとしても被服に関して原始的で純粋な面が強い。

日本人の挨拶の仕方にもオールコックには奇妙である。挨拶は「両手をひざのところまでおろし、身をかがめ、息を押し殺したような感じで、口上をのべる」。からだを低く折りまげてする品位があつて入念なおじぎ、愛想がよく理知的で礼儀正しい国民であり、その上上品で、柔らかなことはで話す。その身のかがめ方の深さと敬意を表する程度とが密接な関係にあることは一目瞭然である(上一四九頁)⁽¹³⁾。

長崎奉行との接見がオールコックの日本での最初の外交交渉である。その様式は単純であるが威厳にみちていた。客が奉行と同格対等なら廊下の端で挨拶を交わしたのち、接見室に招き入れられる。外国人にはベンチあるいは椅子が用意され、煙草盆などが出される。全ては礼儀正しく行われ

るが、決断を要する重要取引には数時間を要するので退屈と徒勞を強く感ずる。それは先ずオランダ語に訳し、更に日本語に訳し直し、それをもう一度逆もどりさせるといふ二重に翻訳する必要があったからである。しかも最初のことばの真意あるいは精神が果たして通じているかいないのか「全然わからない」といふ愉快な状態」が続いている。このような状況を改善するには、外国人が自ら日本語を話すようになるか、日本人が英語を実際的な目的のために使えるようになることが必要である。オールコックは、日本人がこのため非常な努力をなしており、遠からずオランダ語を廢して英語がとって代わるだろうと予見している。

長崎奉行との交渉のちオールコックは江戸へ上るが、この長崎から江戸への道は単なる距離ではなく、二世紀という年月が横たわっているといふ(上一六〇頁)。鎖国政策の強行は、献上品持参の使節以外に江戸に至る者はなかったが、ペリー提督の遠征(一八五四、嘉永七年)以来この五年間に諸外国の代表たちが新しい条約の批准を交換するため、また貿易の自由な發展を妨げる条件を廢することを唯一の目的として江戸に至り始めた。和、露、米、英、仏の各条約が相ついで締結され、江戸への扉がこれらの条約のために開かれて、外国の外交官を駐在させることになったのである。

しかしそれは、国家の屈辱と敗北をもたらすだけのヨーロッパ列強との衝突をさけただけである。日本の支配階級は主として国内の弱気ないし臆病な党派の言動によって広められた危機説に讓歩しただけで、外国人に対してはいぜんとして敵意を抱いていたのである。すなわち、条約締結の拒否は戦争になるとの恐れから、一時しのぎの策をとって讓歩をなし、時機

を得て改正を行なおうとするものである。このような事情に関してオールコックは、東洋人は条約締結に際しては、圧力を受けて讓歩しながらも被征服者、弱者として抵抗し、偽りの服従をする権利を留保しているという。それ故、十分に強くなつたと思う時期に至つたならば奪われたものを強引に取りもどそうとするだろう。しかも当初、条約締結時に脅威を抱きすぎたが戦争の恐れのないことを知ったとき、国内の過激派の憤りの方が危険の源泉となるだろうと正しく推測、予期している。

六

市中の状況の觀察はオールコックの関心の大きさを物語って微細なところまでなされている。

まず辻芸人の姿に驚いている。太鼓、横笛、弦楽器が互に隣りの音を消そうとして頑張っているような「ドンチャン騒ぎ」。そのありさまはこの世のものとは思えぬような音だといっている。中国生活を経験した者も含めて多くの者は日本の音楽にはなじまなかったやうでその「非音楽性」⁽¹⁴⁾を指摘するが、オールコックもその一人である。

街頭に見られる上流階級の男性は服装の好みや着つけに気をくばり盛装して歩きまわるが、女性は外出しないようだったという。このことから多くの者は「日本女性論」を述べ始めることになる(このことに関しては稿を改める)。裏通りにまわれば、子供は半身または全身はだかで、ほとんどの女はすくなくともひとりの子供を胸に、また往々にして一人の子供を背中につれてゐる。あきらかに日本は多産系であると推測する。いづれにしても子供が大事にされていることを見るにつけて、ここは子供の樂園だ、

と結論する。

町を歩くと、商店のにぎわいからかなり商工業が行われていることを知り、貿易の可能性の大きいことを喜ぶのである。また日本の生産(能)力に関しては、長崎海軍伝習所付属の気罐工場を見学して高く評価している。そこでは蒸気機関の修繕、製造に努力しているが、それらは精力と忍耐を以って全て——建物、ドックの設計、建設、レンガ、それを焼く窯、修理に必要な部品の製造——を作り出すことから始めたものである。かつては蒸気船、蒸気機関を見るだけであったのに、自ら蒸気機関を作り出すに至ったのは日本人の進取の気象と器用さを示す証拠(上一五三頁)であるとともに、日本に於ける急速の進歩をもたらした潜在的な能力に注目しているのである。

しかし、旧来の、特に農業における、生産様式から、卵は豊富であるが鶏肉が欠乏していること、羊がいらないから羊肉もない。魚食・菜食主義なので食用牛は飼育していない。役牛を以って牛肉としても、それはなめし皮にしかならぬような代物だという。また、果実の小粒なこと、野菜類の品種の少なさも知る。このように彼ら自身の日常の糧食不足を体験したことから、日本における農業の構造改革、品種改良の必要を提言している。

オールコックは日本および日本人について少しづく体験し、観察を増し、日本および日本人の将来の方向を見抜こうとしているかのようである。例えば、江戸湾投錨後に見る江戸湾についての観察は次の様に展開される。すなわち湾は遠浅で自然の防備となっている。その間に五つの砲台がある。それらは高潮点から数フィートしかない低いものであるが花崗岩でがっちり作られている。以上は自然観察である。これに続けて、各砲

台は管理が行き届き、備えられた大砲は口径ではあるが用心深く保護されている、砲口は全ゆるる方向に向けられており、増大の一端を辿っていることが観察される、と記述している。これは砲台の表面的な観察ではなく、砲台の防衛能力以上に海防増強の、従って日本の対外姿勢の、意図、方向を推測したものといえる。また江戸湾に見られる小船舶についても、日本人は船に塗料をぬることを嫌うような点はヨーロッパと異なると奇異を記述しているが、さらに一歩進めて、エンジンや金具類はよく手入れされていると指摘し、日本人水夫の気質や能力を見て取っているのである。

註

- (1) 『大君の都』岩波文庫版。以下書名を略す。なお本書執筆の動機は、日本人に關する西欧の知識に新たに貢献しようとするところにあった。
- (2) オールコックは、パーチャス(イギリス人牧師)、マルコ・ポーロ、メンデスピント、ケンプファー、トウーンベリ等の名を挙げている。
- (3) 一六五八年頃スコットランド・ダムフリース生れ。植民地の事業拡張に専念しニューイングランドと西インド諸島間を往来。イングランド銀行成立の発起人のひとり。英国の国家財政の確立と国民的統一に尽力。
- (4) 『ペリーは、なぜ日本に來たか』曾村保信、新潮選書、昭和六二年。二六頁。本書はアメリカ海軍史の流れにおいて、ペリー艦隊來日の歴史的背景を論証している。
- (5) 同前一二二頁。また、『日本俘虜実記』上・下、ゴロウニン(徳力真太郎訳)講談社学術文庫参照。ロシア側が執拗に交易を求めるのは、北方で不足している米穀その他日用物資をヨーロッパから輸送するよりも日本との交易によって入手することが目的であった。ディアナ号艦長ゴロウニンの任務の主たるものはそのための「ロシア帝国の東方の辺境の未だ詳らかでない地域の発見と測量」にあった(一七頁)。そしてこのような所謂「北辺の脅威」に対し日本国内に海防論が台頭する一方で、開国交易の論議も起り、日本も国際的な動きにまきこまれて行くことになる。

(6) 『ペリーは、なぜ日本に来たか』八八頁。

(7) 同前五四頁

(8) 同前三七頁

(9) かつて読んだ何らかの書を通して日本を夢の国と見なす記事は多い。例えば『フランス人の幕末明治観』モンブラン他著、新人物往来社、「八日本」という語が多くを夢をかきたてる。「幻想的な美しい漆器の国への旅の思いを抱く」(八三頁)といわれる。また日本に関する書物を読むうちに日本に関する好奇心やみがたく日本に密航し、七ヶ月収監された者もいる。『マクドナルド「日本回想記」ウイリアム・ルイス、村上直次郎編、刀水書房参照。

もちろん、来日して反日感情を持つに至る例もある。例えば、「私はどうしても日本人が好きになれません。われわれにたいしてつねに憎悪心をたぎらせ、けっして信用してかかろうとしないのです」(『ある英国外交官の明治維新』ヒュー・コータイツ、中央公論社、三三頁)、「日本の町はどれも同じ。どの町でも失望。町並は汚いし、煉瓦造りの県庁の周囲は野原とはこりだらけの道路ばかり。不細工で灰色の小屋のような家々の群はさながら草を食む家畜のよう」(『明治滞在日記』A・ベルソール、新人物往来社、十頁)。

(10) 日本の宗教について論ずる者は多いが、その内、日本人の無宗教性、無関心を指摘することも少なくない。「日本人はこと宗教問題に関してはまったく無関心で有名」(『江戸幕府帯在記』E・スエンソン、新人物往来社、三七頁)、「日本人自身も自分達の宗教をよく知らないようである」(『スイス領事の見た幕末日本』ルドフ・リングダウ、新人物往来社、四九頁)、「宗教という見地からいうと、日本は芸術の見地におけるのに劣らず独創的である。……日本人は神を信じてはいないし、もう信じもしない。だがあちこちで、とりわけ田舎で、しかも女性達の間で、若干の見せかけの信仰がもたれているが、これは単なる祭りや娯楽の口実なのである」(『フランス人の幕末明治観』モンブラン他、新人物往来社、一二三頁)、「彼等が容易にキリスト教に近付き得るといふことは、このような件に関して彼等が無関心であることの結果にすぎない」(『スイス領事の見た幕末日本』四七頁)、「これと同種のものに、「日本人に対する熱心な布教、教育活動が行われているが、これには日本人が妥協的な宗教観しか抱いておらず、そもそも日本に国家宗教がないことが大いにあざかっている」(『ドイツ貴族の明治宮廷記』O・モール、新人物往来社、三

八頁)。

(11) 法の厳しさについて。「日本の法律は鉄のピラミッドのようなもので、……それを破壊することはおろか変更することもできないのである。……欠点のうち最も重大なものは刑罰の過酷なことである」(『ロシア士官の見た徳川日本』ゴロウニン、講談社学術文庫、八四頁)、「一般的性格として、法律はきわめて厳しく、生命と財産を擁護するため、厳格に試行されている。償い(同害復讐法)の原理が彼らの間で一般におこなわれている」(奉行は生殺与奪の権限をもっている)、『マクドナルド「日本回想記」一六三頁)。ゴロウニンは法に関して全く反対のこと、すなわち「日本の法律は、多くのヨーロッパの国の法律より比較にならぬほど人道的である、と私はあえて言う」(同前八六頁)、「そしてその法の厳しさについて日本人は「日本の法律を外国人がどう思おうと、日本人にとってはこれがよいのです、と通訳たちは答えた」とゴロウニンはいつている(同前一六九頁)。

(12) お歯黒に関しては日本の奇習、悪習と記録するものが多い。日本の女性にとって「大きな欠点となるのは、結婚する時に若い娘たちが自分の眉を抜いて歯を黒く染めるという恐るべき習慣」(『イタリヤ外交官の明治維新』ヒューブナー、新人物往来社、十一頁)、「日本の女は、結婚すると腐食性の強い液でもって歯を黒く染める。唇がそのためにすっかり歪められてしまうこともあるほどだ」(『ロシア艦隊幕末来訪記』ヴィンセスラフツォフ、新人物往来社、四六頁)、「婚約が整うと花嫁は、鉄屑と何かの植物の汁の溶液で歯を黒く染めるのである。そのため嫁たちは生涯を黒い歯で過ごし、それが人妻や未亡人の顔立ちになるのである」(『ロシア士官の見た徳川日本』八九頁)。しかしこのような風習も「今では婦人たちはフランスの流行を追ってパリ風に服を着て、なくなった」(『英国外交官の見た幕末維新』ミットフォード、新人物往来社、注)。

(13) お辞儀の仕方も来日外国人には奇妙に見えたらしく多くの者が記述している。街頭で日本人が出会ふと「最初の挨拶のあと数分間はお互いにお世辞を言ったり、頭を下げたりして相手の健康や身内の者のことなど尋ね合っている。……双方でたくさん鄭重な挨拶を述べてからでないと決して用件にかからず、こうして三、四分間も挨拶やお世辞を述べ合う」(『ロシア士官の見た徳川日本』九五頁)、「そばで見ていて滑稽なほどの挨拶がとりかわされ出し

た。……まずはじめに両手をそろって上体を屈め、両手を膝において深く頭を下げてお辞儀をした。そうしながらも、心をこめて長々と齒の間から息を吸い込んでいた」(『ロシア艦隊幕末来訪記』一二四頁)、「お互いに深々と頭を下げてお辞儀をする様子など(実見せねば分からぬ)。……ひれ伏すという行為から屈辱的に見える要素を抜き去り、そうしてその行為に、礼儀正しさと尊敬とをいくぶん誇張みに表明しているという性格だけを賦与することになるのである」(『イタリア外交官の明治維新』十一頁)、「膝に手のひらをのせ、やや中腰になって、ほぼ直角にまで上体を折り曲げると、彼らは噉りあげるように息をすいこみ、つぎには息をシューシュー吐きながら幾度もこの体操のような動作をくりかえす。……それがすむと、めいめいが腰を曲げた姿勢のまま、じつに長ったらしいことはを鼻にかかった声で早口に話す。どうもそれはそらでおぼえた挨拶や感動のせりふであるらしい」(『回想の明治維新』メーチニコフ、岩波書店、四八頁)。

(14)

日本の音楽について。「日本の音楽はわれわれのものと比較のしようがない。しかし民謡の中に、優しい気持ちの良い主題がみとれる。同様に日本人の耳が確かだということも認めねばならない」(『スイス領事の見た幕末日本』六一頁)、「ヨーロッパ人は日本の音楽や歌謡をきいても楽しいと思わない。……三本の弦の楽器そのものの音色は美しい。ヨーロッパの音楽には、日本の国民音楽にあるいくつかの音程が欠けている。音階はたった五つの楽音は私たちの興味を惹かず、芝居に長く引き留めることはできない。日本の音楽は私たちの耳に快いものではない。不協和音とそれに伴う役者の芝居があった台詞が私たちの耳をいらさらせる」(『明治のジャボンスコ』ヨセフ・コジェンスキー、サイマル出版会、一〇一、九二頁)。中国の音楽との対比においてその騒がしさは同程度とする者は少数のようである。「オーケストラは、中国におけるほど厭うべきものではない。少なくともあれほど騒がしくはない」、「歌唱は中国ほど騒々しくはない。しかしわれわれの耳にはやはりあまり快く聞こえない。もっともメロディーは独特で、とくには何か魅力的なものが感じられる。ところが日本人はその音楽に魅了されており、音楽なしで饗宴にのぞむことなどめったにない」(『エルベ艦長幕末記』ヴェルナー、新人物往来社、一〇〇、一〇六頁)。このように日本の音楽について「騒々しい」と表現するのは、彼らは恐らく芝居の下座や酒宴でのにぎやかな遊びに接す

ることから得た結論であると思われる。来日当初耳なれなかつた音曲も理解されるようになる。「はじめのうちは西洋人の耳には聞いても全然面白くもない。ところが何回も聞いているうちに味わいが次第にわかるようになる。いやそれどころか、日本古来の音楽にはそれなりの妖しいまでに美しい魅力があることがわかってくる」(『明治日本の面影』小泉八雲、講談社学術文庫、五七頁)。

△未完▽